

今回の一言

幼稚園は子どもがはじめて出会う学校です

美哉幼稚園も属している「全日本私立幼稚園連合会」が掲げているキャッチコピーです。そして、昨年、幼稚園にとって、とても大きな法改正がありました。「教育三法」の改正です。

子どもは学校法人として、これらの法をふまえて活動するわけですから、法律にはなかなか関心がもちにくいですが、大事なところだけ、ほんの少しおつきあい下さい。

「学校教育法」の改正が6月にあり、そこで第1章第1条はこう規定されました。

「この法律で、学校とは、幼稚園、小学校、中学校、高等学校、中等教育学校、特別支援学校、大学及び高等専門学校とする」

改正以前はこうでした。

「この法律で、学校とは、小学校、中学校、高等学校、中等教育学校、大学、高等専門学校、特別支援学校及び幼稚園とする」

「なんだ、順番が変わったくらいで」と思うかも知れません。けれど、幼稚園が国の教育機関の中で筆頭に位置づけられたことの意味は、とても大きいものです。この規定にもとづいて、予算や制度が考えられるようになり様々な取り組みがなされるようになるからです。

また、幼児教育にたいする社会的な期待が、今とても高まっていることの現れといえるでしょう。その背景には、いじめの問題を初めとして、子どもの育ちに関わる多くの困難があります。それらはもとをたどると幼児期に原因の一端があると考えられてきたからです。

「幼児教育が義務教育以降の教育の基盤だ」「幼稚園は学校教育の筆頭になった」と聞くと、たちまち誤解しそうです。「早いうちから勉強させた方がいいということだ」と。

同じ学校といっても、小学校教育と幼児教育では、教育の意味内容も方法もまったく違ってきます（ついでに言うと、高校までの教育と大学の教育も違います）。

1学期のクラス懇談のおりにも話をしたと思いますが、その違いについての説明は機会を改めることにして、一言で言えば、幼児教育は遊びが中心だということです。遊びを通して学ぶのです。ある人はその独特な教育のありようを「遊び学び」と呼んでいます。言うなれば遊学です。



幼稚園入園は学校生活の初めの一步、それは幼稚園遊学なのです。

今回の一言

## 幼稚園遊学で育つもの

縄跳びと独楽廻す子と風花と 永井龍男

まるで、ある日の美哉幼稚園を写生したような句です。「風花」というのは実に美しい日本語なので、毎年必ず風花の俳句を子どもたちに紹介しています。晴れていながら、雪片がひらひらと舞うさまを、風に舞う花の如くに見て「風花」と名づけるなんて、感性と言葉の幸福な結婚ですね。

そんな雪がちらりちらりと舞うような日にも、子どもは風の子、びさいっことは園庭で縄跳びをしたり、登ったり走ったりしています。先日も「さむうーい。でも雪はうれしいー」って。

さすがにこの頃は、室内遊びの時間が多くなりがちですが、その中でお正月遊びは遊びの一角を占めています。

それは、数人で遊ぶものが多く、はねつきは幼稚園児にはむづかしいですが、すぐろくは一人ではできませんし、福笑いを一人でやっていたら不気味です。かるた取りでは、子どもの早さに大人はかかないません。絵でとる子もいますが、リズムに乗って言葉も覚えていきます。「遊び学び」の見えやすい一例ですね。

独楽回しは、挑戦のしがいのある遊びです。



独楽をしっかりつかみつつ、紐をくるくると巻いてゆくには相当の器用さが要求されます。もちろんなかなかできないので、挑戦するうちに根気が養われます。紐が巻けても、投げた後の引きの感覚をつかむまではしばらくかかります。できなければできないほど、回ったときの嬉しさはひとしおです。

個人技も、股をくぐって回す、回ったら手のひらに乗せるなど、どんな

発展します。

また、園では自分たちで独楽に色や模様を描くのですが、回ったときに思いもよらない美しい色が出現するの

も驚きです。個人の課題がクリアされると、次に遊びは協同性を帯びてきます。数人で息を合わせてまわし、回っている長さを競う。ぶつけ合って回り続けければ勝ち。様々なルールが自然発生的に定められていきます。

こうして、手を使い・目を使い・足腰を使い、気力を鍛えつつ、友だち関係を結びながら遊びが展開します。

このような、体を使いつつ人間関係を醸成する遊びの豊かさにかんがみると、「コンピュータや映像を駆使したおもちゃでの遊びは、実に一面的で（つまり視覚情報の圧倒的優位と、体の極小化）貧しいものに思えてなりません。大学生などと話している

と、「好きなゲーム」をして遊んだ気になっ

ているのですが、どうも私には遊ばれているように見えてなりません。遊びの本質といえるような、遊びのただ中で閃き出る自発性や創造性が、そこには感じられないからです。



## 今回の一言

具体的なこと・抽象的なこと

「2+3は？」と聞いてくる園児さんがあります。ぼく計算ができるんだといわんばかりな顔で、答えがのどまで出かかっているようです。そんな時だいたい私は聞き返します。

「テーブルの上のりんごが2つありました。お母さんがみかんを3つ持ってきました。さて、テーブルの上の果物は全部でいくつあるでしょう」「これ」案外答えられないのです。

「小学校に入ると勉強が始まる」といいますが、それは抽象的な学びが始まるということ。教室で椅子に座って、頭を使って学びます。幼稚園では体を使って学びます。「具体的」というのは、体が関わっていると書きますが、体を使い五感をつかうことを体験といえます。

先日ある研修会で、上智大学の奈須正裕先生の話がありました。小学一年生の算数の時間を見に行ったときのこと。先生が「折り紙が12枚ありました。7枚使いました。あと何枚残っているでしょう」と質問をしました。「一番前の男の子が、この質問を聞いて机の中をゴソゴソ。何かをとりだして一言、「折り紙ー!」。

おつて、折の紙を突きつけられた先生は「ゴソゴソゴソゴソゴソゴソ」



「今は何する時間ですか?」「今は関係ないからしまいなさい」と言ったこのこと。え? 関係ないだって! 折り紙の話をしているのに本物の折り紙は関係ない。学校の勉強でだいじなのは12つとゴソゴソおつて、その子の経験や生活をカッパに「ゴソゴソ」文字や数式で考えていくのが、国語・算数・理科・社会という「教科」です。

小学校以降の勉強は教科学習をとおして抽象的に考える能力を伸ばしていきます。奈須先生いわく、自分の経験をもち込むことを拒絶してどんどん孤立化する学び。「関係ない」という小島よしおスタイルの学び。その行きすぎによって弊害がでてきたため、小学校に「生活科」や「総合学習」が導入されました。それらはいわば幼稚園モデルなのです。

幼稚園での遊びは、生活・感性・知性、国語・算数・図工などいろいろなことがむすびついて「関係がある」総合的な学びである、このこと。折の紙は手裏剣になる。ピアノになる。友だちでいっしょに楽しめる。親子で夢中になれる。折るとき紙と指との感触、ハシとハシが合わさって折れたときのきれいな、美的快感。

折り紙という経験は多様なひだをもっています。多様なものを経験するには時間がかかります。だから時間をかけなければいけないのです。

その時間こそ幼稚園生活で保証すべきものなのです。



今回の一言

めざせ！「後伸びする子ども」

一学期に行ったアンケートの「園生活に期待すること」の項目で、数人の方から要望をいただきました。「勉強を教えてほしい」。

でも、「勉強は教えません」とお答えします。その理由は、この通信を読んで下さっている方は、お分かりいただけると思います。

前回申しましたように、勉強という抽象的学びは小学校以降にやるべき事で、幼稚園でやるべき事は体験をひらきまわして「ひらき」幼児期の具体的な体験・遊びが「勉強」の基礎になるのです。

先日的美哉幼稚園七十九歳の誕生日に、ある先生がそれを園児に話すとき、まず子どもたちの年齢をたずね、次に「一、二、三、四・・・と七十九まで数え上げました。「七十九歳」と言ってしまうは一秒

で済みます。四歳や五歳と比べて長いと頭ではわかります。しかし、七十九を数え上げるのには数十秒かかります。長くかかります。長いものを長いもので示すのが具体的な示し方であり、時間がかかります。だから聞いている方も「長いなあ」と感じる事ができます。時間をかけることが大切なのです。

でも、概念や数を知ると、時間を短縮するしかたで頭が回るようになるので、「長い」と感じる感性やイメージがなくなる傾向があります。



昭和5年の美哉幼稚園

創立記念日の話の後、ある子どもが「昔は戦争があった」と言ったので、美哉幼稚園が一歳のころは戦争の前だったんだよ、と云ったらその子は答えました。「知っている」と。

私は戦場を体験したことはありませんので、戦争のことを「知っている」とは言えません。幼児がいとも簡単に「知っている」というのを聞いてためらいを覚えます。

痛くもかゆくもない知識を増やすことが大切なわけではありません。それはむしろ恐ろしいことです。戦争がどんなことなのか、想像を働かせることが大切で、その恐ろしさや痛みなどを想像できたら少しは知ったことになるでしょう。

情報としての知識を頭に入れるような勉強や、抽象的な学びが悪いわけではありません。ただ、それをやる時期をあやまる問題です。たしかに小学校で「勉強」が始まることは、親にとって気がかりです。うちの子はついていけるかしら、と心配にもなります。その不安が、ささやくのかもしれない、遅れないように、スタートを早くすればいい。」と。

そこで考えましよう。少しでも早くとか、他人より早く、というところが、その子どもの生涯を考えたとき、どういう意味があるのでしょうか。

早期に教科学習的な教育をする、フライングをして出だしは早いけど、案外早く入ったり込んで伸び悩んだり、加速度がつかなかったりするのを「存知でしょうか。人生は短距離競走ではありません。

私ども私立幼稚園が育もうとしている子どもは「後伸びする子ども」なのです。

今回の一言

家庭と幼稚園の役割

「幼稚園は子どもが初めて出会う学校です」という全日本私立幼稚園連合会が掲げている言葉を第一回に紹介しましたが、続きがあります。

「親にとって親としてはじめて出会う学びの場です」

幼稚園は学校ですが、勉強をする学校ではなくて、遊びを通して学ぶ学校です。遊びといういきいきした活動のなかで、子どもの主体性や創造性が発揮されます。体験がふくらみ、生活力がついていきます。



ですから幼稚園の先生の仕事は、先生が一方的に子どもに何かを教えることもありませんが、むしろ、子どもの自発性が育つような遊びの環境を工夫することです。これはむづかしいことです。

教育といっても、小学校以降の教育と幼児教育とは違っていて、それぞれ取り替えること

突如ふってきた雪に気づき、思わず窓にへばりついて見とれている子どもたち

ができない役割があります。同じように、家庭と幼稚園との間にも、それはあります。

幼稚園の先生は決して親の肩代わりなどできないし、逆もまた然りです。

先日、小学校の入学説明会に行ったところ、校長先生が保護者にたいして強調して言われていたことは、こうです。

「文字は一から学校で教えますから心配しなくてけっこうです。親はしつけの方をお願いします」。

お互いの守備範囲をわきまえることが大切だということでしょう。たとえば、野球で内野手が外野まで下がっていたり、キャッチャーがピッチャーの後ろに座っていたりしたらどうなるでしょうか。守備範囲がわかっていて、それぞれの役割を果たしながら協力し、足りないところを補い合えるなら、そのチームは強くなるでしょうし、ゲームもおもしろくなるでしょう。

「チーム」を「社会」に、「ゲーム」を「生活」に、あるいは「子育て」に、置きかえることができるかも知れません。

今の複雑な社会状況では、役割といっても、昔とはちがって、なかなか見えにくくなっています。それぞれの守備範囲が、この通信を通してちょっとでも見えたらいいなあと思っています。



自分を発揮しながらひとと協調して作った作品。それが名前にも現れています。その名も「ゆゆあみさるす」。みんなの名前を一文字づつとっています。